

月刊 地域支え合い情報

[2018年10月20日発行]

本体 286円+税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



「福祉・健康まつり」で、住民と再会をよるこび合う元「生活支援員」(宮城県南三陸町/詳しくは3頁へ)

特集 被災者支援従事者の肩書を外して

- 介護の現場で活躍・ボランティアとして地域を結ぶ力に ③
佐々木茂子さん・芳賀タエ子さん・渡辺忍さん (宮城県南三陸町)
- 地域の集い場づくりに一層励む ⑤
及川智子さん (宮城県石巻市)
- 「ふまねっと運動」を通じて、地域住民をつなぐ ⑦
阿部弘子さん (宮城県女川町)

☆専門家に聞く地域づくりのヒント
(佛敎大学 福祉教育開発センター 専任講師 後藤 至功さん)

東北の元気⑥ ⑨
ミニデイ (福島県楢葉町)

まじわる災害公営住宅⑦ ⑩
玉浦西地区 (宮城県岩沼市)

東北の元気⑦ ⑪
いわき農園 (岩手県山田町)

場の力⑩ ⑫
カフェ・時代屋 (宮城県名取市)

インタビューあの人に会いたい⑩ ⑬
特定非営利活動法人日本ホスピタル・クラウン協会
クラウン・マミーさん

どこでもサロン⑮ ⑭
青空学校 (福島県猪苗代町)

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

暮らしを支える支援員⑳ ⑯
名取市サポートセンター「どっと・なとり」(宮城県名取市)

・購読者を募集しています! ・次号予告 ・お知らせ

特集

被災者支援従事者の 肩書を外して

東日本大震災後、特に沿岸部では、まちや住民の生活が大きく変わってしまいました。

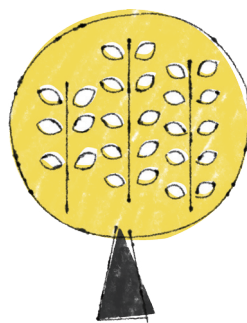
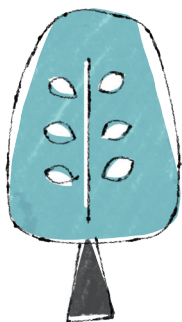
仮設住宅や災害公営住宅など、新たな住まいで生活を送ることになった人を支えるべく、自治体ごとに、「被災者支援従事者」が配置されました。

自治体ごとに異なる名称をもち、体制や活動もさまざまですが、業務として、多くは戸別訪問による見守りや相談対応、集いの場づくりや交流の促進などに取り組んできました。

今回の特集では、かつて被災者支援従事者として奔走した人たちの当時と現在をご紹介します。

当時の経験や思いとともに、福祉事業所で介護の仕事に就く人、町内のボランティア活動に取り組む人、近隣住民の集いの場を設けている人、介護予防の普及を推進する人。

被災者支援従事者の職務を終えたいまも、新たな地域の福祉人材として、それぞれのかたちで、まちの人たちの豊かな地域生活をあと押ししています。





今年9月に開催され、町の住民の笑顔に包まれた「福祉・健康まつり」。写真は恒例の餅まきの様子。開催に助力したのが「ほっとバンク」登録の元生活支援員らボランティアだ

介護の現場で活躍・ボランティアとして 地域を結ぶ力に

◎佐々木茂子さん・芳賀タエ子さん・渡辺忍さん（宮城県南三陸町）

ポイント

- 被災者支援のなかで身につけた、高齢者との接し方や専門知識は、いまの暮らしや仕事でも生かされている
- 相手の境遇や心情に十分配慮して、ワンクッションおいて伝えるなど、適切な距離感で寄り添うことが大事。いま、住民の生活や求められる支援内容は変わっても、地域住民や生活援助員が「そっと寄り添っていく」たいせつさは、変わらない
- 平時からの声かけ、情報発信が、災害時の助け合いや減災につながる

東日本大震災後、南三陸町社会福祉協議会は「被災者生活支援センター」を町内外に設置。「生活支援員」を配置して、仮設住宅の見守り訪問やつながりづくりのためのお茶会、仮設生活の運動不足解消の運動、住民の憩い場づくり、地域情報紙作成などの支援活動を行ってきた。支援員もその多くが、南三陸町に暮らす被災者であった。2017年度で同事業は終了したが、かつての生活支援員は、町社協のデイサービスや登録ボランティア制度※「ほっとバンク」、生活支援コーディネーターなどで、被災者支援の経験も生かして活動している。

「支援員の延長上にある」

今回は、3人の元支援員のこれまでと現在を紹介する。

渡辺忍さんは、今年3月まで支援員を務め、4月からは町社協のデイサービスに勤務している。渡辺さんは、津波で職

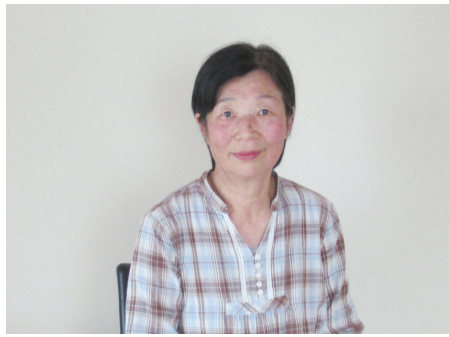
場が流出して失職。「町のために役に立てたら」と、支援員職に応募した。住民に接する時は傾聴の姿勢で、たまった思いを吐き出してもらえようにした。信頼されて、家族に言えない話を打ち明けられたこともある。一方で「あんたたち来ても何もなんね」と言われたこともある。「おっかなかったけれど、『天気いいですね』とか、たわいない会話をして『元氣そうだな』と相手の様子を見るようにしていました」。

「その延長上にある」と感じる。デイサービスでのレクリエーションや介助の際に、高齢者と接してきた経験が生きているのだ。ほかにも、支援員時代に、福祉の専門職である同僚から教わった知識がいまも役立っているという。たとえば、高齢者の身体の支え方や認知症の症状などがそうだ。

※見守りや声かけ、イベントの手伝いなどのボランティア活動を通じて、住民が住民を支援できる仕組みづくりを目指している。



「元気な高齢者を増やしたい」。渡辺忍さん



「支援員になって私自身救われた」。佐々木茂子さん



福祉・健康まつりで。芳賀タエ子さん（左端）とボランティア仲間たち

日々、現場のなかで身につけた知識は、自身の血肉となっている。

そっと寄り添い続ける

佐々木茂子さんは、仮設住宅に暮らしながら、生活支援員を務めた。

佐々木さんは津波で家が流出し、身内と友人を亡くしている。失ったものの大きさに、「生きる力がない」「仮設住宅から出たくない」思っていたが、ある時、敷地内の高校から聞こえてきた吹奏楽の音、野球のボールを打つ音―生きる力に満ちた日常の音―が、ふいに「生きるろ、生きるろ」と心に響いて、前向きな気持ち萌芽生える。訪問した支援員に誘われて、「自分のような人がいるはず。お話を聞くことで寄り添えたら」と道を決める。同じ目線に立って、「無理に踏み込まず、そっと寄り添う」ことを心がけた。家族を亡くし、閉じこもった仮設住民がいた。ものづくりをしていると耳に、「自分の世界に閉じ込

めないで見せて」と声をかけると、生きいきと作品を見せてくれた。作品をつくることでつらい思いが救われていると感じた。病気を患った住民には、接点のある地域や家族の話題を出して、少しでも気を紛らわせてもらえるように慮った。

現在はほっとバンクに登録。福祉作業所で利用者として交流し、その懸命な姿に心打たれている。イベント会場の受付で、仮設住宅の元住民から、「あの時は助かった」と握手された時は、「支援員をやつて良かった」と強く感じた。

高台に防災集団移転したあと、行政区ができるまでは、支援員時代の経験も生かして自主的に近隣の見守りも行った。いま、佐々木さんは行政区の役員として、地区の災害公営住宅に常駐する生活援助員とともに、住民の良きつなぎ役になっている。「そつとつながって、互いのつながりを育てていければ」と感じている。

被災者支援から 平時の地域支え合いへ

芳賀タエ子さんは、生活支援員を務めたあと、ほっとバンクで子育て支援やイベント運営に協力。「ほっとバンクがあることで、仕事をする側も刺激になるし、必要とされていると感じられる」と意義を語る。

芳賀さんは、自立再建のために一早く避難所を出たことで、必要な支援が受けられなかったと言いつつ、そんななかで「自分のように困っている人がいるはず。自分が助けられること、発信できることがある」と考え、支援員の職について。

震災以前は着付け教室をしていて顔が広く、訪問先で生徒と再会し、昔の話をし、軽く肩を叩くなどしてふれあうこともあった。「相手と深いつながりを築くには、業務的なやりとりに終始せず、柔軟に個人の感情を仕事に入れることも必要では。腹のうちを見せることで心を開いてもらえる」と

自身の考えを明かす。

震災を経験して、平時からの声かけがたいせつだと芳賀さんは改めて感じている。「近隣の人に挨拶して、自分の立ち位置を発信しないと、有事にも気にかけてもらえない。日頃のつながりがあれば、災害復興も早い」とし、「若い人は地域に入るのを面倒がり、個人情報提供を拒む。そこをどのように引き出していくかに、生活支援コーディネーターや生活援助員の裁量が問われる。社協と連携し、パイプ役になって見守りにつなげて」と期待する。

今回の3人の話は、被災者支援で培った経験が、現在の仕事や生活、意識にもつながっていることを伝えている。再会をよるこんでくれる人がいて、かけ続けた言葉は確かにその人に残っている。新たに生まれたつながりは、平時の支え合いに続いている。――当時の支援員の歩みと思いは、いまの町に確かに息づいているのだ。田



近所同士のたいせつな交流の時間

地域の集い場づくりに一層励む

◎及川智子さん（宮城県石巻市）

ポイント

- 被災者支援に従事する前から、地元の地区婦人部として、地域活動や被災者のための物資支援などに取り組んだ
- 被災者支援従事者を退職後、地元でさらなる集いの場を設けている

宮城県石巻市蛇田の谷地区の住民有志が体操やお茶飲みで交流を深める「四季の会」という団体がある。その代表を務めるのが、及川智子さんだ。毎月、第2木曜日には及川さんの自宅、第4木曜日には地区の集会所に集まる。20人近くが参加し、和気あいあいと過ごしている。

及川さんは、東日本大震災後、同市が仮設住宅入居者の生活支援を主な目的として、同市社会福祉協議会に配置した地域生活支援員（以下、支援員）を約1年間務めた経験をもつ。

近隣住民の集い場づくり

集会所に集まる日は、ラジオ体操や介護予防のゲームなどをして、身体を動かす。その合間に、休憩をとりながらお茶飲みをする。お茶飲み中はもちろんのこと、体操をしながらも、参加者同士の会話がもろあがる。及川さんの自宅に集まるときは、お茶飲みが中心だが、脳トレをしたり、歌

を歌ったりもする。「集まるのは月2回くらいがちょうどいい。でも、毎回体操をするというのも、たいへん」と話す及川さん。無理なく、楽しく、個人の健康と住民間のつながりを維持することに貢献している。

活動は、及川さんがすべての進行を担うわけではなく、メンバー皆で道具の準備や片付けもする。体操やゲームの内容についても、「こういうことをしてみたら?」「こうしたらいいよ」と、そのときに思ったことを気軽に提案し合っている。「自分たちの集いの場は自分たちでつくるう」。メンバーたちから、そんな気持ちがあがった。

震災後に同地区に転居してきた90歳の女性は、すっかりなじみ、ほかのメンバーからも、「こういう活動があることで、町内で挨拶できる相手が増えた」という声が聞かれる。いつも参加している町内会長も、「私たちが男だっ、こういう会があれば楽しめる」と話し、



及川智子さん

「目標は、みんなで笑顔でいること」

震災直後の支援に従事

及川さんが支援員を務めていたこともふまえて、「みんなの思いをくんでくれる人。人のために動いてくれる」と、ありがたみを感じている。

2011年3月11日、東日本大震災の発生時、海からおよそ3キロメートルの位置にある、及川さんの自宅では、海水が軒下まで流れてきたり、大きな揺れで家具が倒れたりしていた。幸いなことに、周辺も浸水を免れた家が多く、「蛇田谷地3区婦人部」では、同月30日に、自分たちで集めた衣類を無償で配るなどして、避難生活を送る人たちの支援を行った。



身体を動かすレクリエーションでにぎわう

その年齢でもかまわないという返事をもらい、入職することになった。

その年度の同市の支援員は、自身が住んでいる地域を中心に活動。津波で自宅を流失するなどして、仮設住宅に入居している人たちのもとを戸別訪問したり、一緒にサロンへ参加したりしていた。及川さんも、谷地区を含む蛇田地区にある仮設住宅を担当した。

ある日、仮設住宅の入居者に、身体の具合を尋ねたり、生活の困りごとや変わったことなどを伺おうとしたとき、「あなたは、どこに住んでいるの？」と尋ねられ、「蛇田」と答えた。すると、「じゃあ、(自分と違っ

て)何も被害はなかったんだね」と言われた。そのときは傷ついたが、何度も訪問したり、会話をするうちに、つらい気持ちをぶつけられることもなくなり、「ごくろうさん」とねぎらいの言葉をかけてもらえるようになった。

入居したての仮設住宅団地内では、隣近所のことをよくわからない人も多く、身近な人同士の関係が希薄になってしまいうことも懸念されていた。それは、震災以前から及川さんが婦人部として行事を開いたり、介護予防体操の場を設けるなどの活動をするなかでも、意識されていたことで、通じるものを感じていた。つながりが絶たれてしまわないよう、なかなかサロンに出でこない人のことを気にかけてたり、集いの場に出るきっかけづくりなどに励んだ日々を、いまでも印象強く覚えている。

これからも地域のために

及川さんは、1年間の任期を終え、支援員退職

後にしばらくしてから、交流の場を増やそうと、同会を立ちあげた。

「この会が、私たちにとってのデイサービスみたいなものになっていく。現状維持で続けていきたい」と及川さん。住民同士が集い、思いやる機会をたいせつにすることで、元気に過ごす。同会の活動も3年目。会の行き来で車に乗り合わせるメンバーもいて、介護保険サービスなどに頼り過ぎず、地域で暮らし続けるためのヒントが盛り込まれている。

職務として被災者支援に奔走するよりも前から、地域の人たちのために活動してきた及川さん。業務のなかで悲しさやうれしさも味わい、いままも変わらず、地域のために、住民が力を合わせ支え合うための関係づくりに取り組んでいる。支援員として被災者支援に打ち込んだ住民が、平時の地域づくりに向き合うなかで、地域にその活力や思いが、ゆるやかに広がっていくようだ。



運動する人はもちろん、見ている人も笑顔になれる、「ふまねっと運動」。
女川町上5区集会場での「ばんぶきん株式会社」の活動風景。
右端が阿部弘子さん、左から三人目が遠藤きく子さん（本紙71号参照）



「ふまねっと運動」を通じて、地域住民をつなぐ

◎阿部弘子さん（宮城県女川町）

ポイント

- 支援員として築いたつながり・信頼関係が、ふまねっと運動で地域を回るときに、生きている
- 支援員時代の集い場づくりの働きかけが、自主的なお茶会の運営や「自分たちの地域は自分たちで守る」という地域の互助形成に一役買っている

女川町は、東日本大震災の被災者支援事業として、2011年11月から「こころとからだと暮らしの相談センター」を開設。サブセンターの運営を民間事業者「ばんぶきん株式会社」ほか4組の医療・介護・福祉団体に委託して、看護師やケアマネジャーなどからなる「こころとからだの支援員」を配置した。2017年度の事業終了まで、戸別訪問や仮設住宅や地域での集い場づくりを通じて、被災者の心と身体と暮らしを支えてきた。

阿部弘子さんは、ばんぶきん株式会社で、支援員として働いたひとりだ。町内出身で、震災以前にケアマネジャーとして同社に勤務していた阿部さんは、「地元の人間で、地域のことをわかっていたので、支援員として抵抗なく入れたのかもしれない」と振り返る。

阿部さんたちは、お茶会や体操を通じて、被災した住民同士をつないできた。戸別訪問先で、相談に乗るなどしてきた。心無い言葉を返されて「相手のつらさを十分に汲みとってあげられたか」考え直すこともあったが、あきらめないで何度も声がけし、「弘子ちゃんに声をかけられたら（お茶会に）行かなきゃ」と応えてくれる住民も多かった。「（自分の気持ちを）わかってもらえる」という言葉をかけられるのが、一番うれしい」と阿部さん。それは、ヘルパー・ケアマネジャー時代に感じた思いと同じだった。

一方で、道半ばで辞めていく支援員もいた。「責任が重く、プレッシャーを感じて仕事をしていった人がほとんど。時間に限りがあった、100%の支援はできないなかでの仕事だった」。阿部さんはそう思いを代弁する。自身も葛藤することがあったが、経験を重ねて対応できることも増えてきたという。各地からのボランティアの協力も大きかった。「どこかで吐け口を見出しながら、自分をコントロールしながらでない、たいへんな仕事」と、ひとりで抱えすぎず、燃え尽きないような仕事ができたと良

かったという。

「ふまねっと運動」を推進

現在の阿部さんは、ばんぷきん株式会社で、「ふまねっと運動」を普及推進する。ふまねっと運動とは、50センチ四方のマス目の網を地面に引き、その上でステップを踏むことで、主に高齢者の歩行機能の改善を図る運動学習プログラムだ。注意力や集中力、記憶力を高め、住民の交流を深める効果も期待できるといふ。

同社は、町から介護予防の事業委託を受け、町内7地区を訪ねて、ふまねっと運動を血圧測定やお茶飲みと組み合わせる実施。養成研修を修了したスタッフが指導に当たる。

「足腰が悪いんだけど、ふまねっとをやってみると、歩くのがスムーズになった」「こうして皆で笑うのが一番」と参加者。地域の区長も、「こうして来てくださるのを楽しみに、人が集まる。交流の場にもなっている」と感謝する。

阿部さんも、「活動しな

がら、皆と話したり、少しふざけたり。こうしている時が一番楽しい」と自然体でかかわる。ふまねっと運動の訪問先で、仮設住宅の元住民と再会して、よろこばれることもある。「支援員を続けるなかで皆さんに顔をわかつてもらえた。その時の、人との信頼が続いているのかもしれない。続けてきてよかった」。

ほかに、支援員の仕事がいまにつながっていると感ぜられることがある。仮設住宅でお茶会を体験した住民が、災害公営住宅に移ったあと、お茶会の運営を自主的に担っていることだ。「自分たちの地域は自分たちで守る意識が高まっている」と阿部さんは見ている。「これからもふまねっと運動を通じて、きっかけをつくりたい」と語る。

ふまねっと運動中に、「大丈夫。自信もって」「すばらしかったですね」と参加者に声をかけ、寄り添う阿部さんの姿があった。相手に向ける温かなまなざしは支援員の頃と変わらない。



佛教大学 福祉教育開発センター 専任講師
NPO 法人さくらネット 理事

後藤 至功 (ごとう・ゆきのり) さん

1995年、阪神・淡路大震災にて全壊被災(兵庫県宝塚市出身)。兵庫県社会福祉協議会、(有) コラボねっとを経て、2009年より現職。東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨災害等の支援にかかわりながら、実践研究を進める。主な著書に「災害ボランティア入門」(共著、ミネルヴァ書房)、「支援のための制度と法のあり方とは」(共著、批評社)、「地域福祉の挑戦者たち」(共著、大学教育出版)など。



専門家に聞く地域づくりのヒント

“当事者性” からつながる被災地支援のあり方

被災者支援従事者における「専門性」とは何か

まず、生活支援員に携わった佐々木さんの「同じ目線に立って、無理に踏み込まず、そっと寄り添うことを意識」という言葉や同じく芳賀さんの「柔軟に個人の感情を仕事に入れて、腹のうちを見せることも必要」という考え方に注目してみたい。彼女たちはどちらも被災者でありながら被災者を支援するという「当事者性」をもった支援従事者である。発災後の被災者のケアにおいては、支援従事者の「相手の生活と自分の生活は同じ土俵にあるという感覚」の有無によって、明らかにその後の支援に影響を及ぼすことがある。及川さんが仮設住宅の支援に入った時、被災者から「あなたは蛇田だから(自分と違って)被害はなかったんだね」という言葉に傷ついたというエピソードがあったが、正にこれは、支援従事者と被災者の関係性には「当事者性」が深くかかわっていることがわかる。同じ生きづらさを抱える者同士がつながり、解決を図ることを「セルフヘルプ」というが、被災者支援従事者には、通常の専門職では解決しきれない、こうした「当事者性」や「セルフヘルプ」といった要素が重要であることをこれらの事例は教えてくれる。

次に、被災者に対し専門的な技術、技能でアセスメントし、支援を行うことが重要という専門職の錯覚についてふれたい。被災地支援の現状を鑑みたとき、いささか気になることの一つ

に「医療モデルによる災害支援」があげられる(決してこのこと自体を否定するわけではない)。支援従事者が、「そこに何か問題や課題が潜んでいるのではないかとアセスメントや診断の重要性を掲げ、シートへの情報集約に傾注する姿をしばしば見かけるのだ。一方、ここに登場する被災者支援従事者は皆、日常の「生活」やその人の「可能性」という点を重視している。渡辺さんのように、「たわいない会話をして、元気そうだと相手の様子を見る」という専門性(市民性、住民感覚)が備わっているのだ。日常という空間の主体は専門職ではなく、あくまでもそこに住まう住民であることを改めて確認しておきたい。

被災者支援をとおして見えてきた「私」という存在

斯く言う私も、阪神・淡路大震災の全壊被災者である。福祉の道に進むことは毛頭考えていなかったが、復旧活動にかかわったがゆえに、縁あって社会福祉協議会という就職先を選択することとなった。あれから20年以上が経過したが、あの時身についた知覚や経験が現在の私の支援観につながっているのは間違いない。

阿部さんは、支援従事者時代の実践がふまねっと運動へとつながっているし、ほかの皆さんも支援従事者として培った知覚や経験が、いまの「私」という存在を可視化させているのではないだろうか。



66回目

市民リレー

東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

町に戻った住民が、ミニデイで交流

◎ミニデイ (福島県檜葉町)



福島県
檜葉町



和気あいあいとした雰囲気、口のエクササイズ

お茶飲みでは、料理の作り方を教え合い、友人のカラオケ発表を見に行ったことなど最近あった出来事を語り合う

輪になって、CD音声に従って、身体の各部位の曲げ伸ばし運動

福島県檜葉町の名古谷地区集会所では、ミニデイが週一回開かれている。山田岡地区の住民が体操やお茶飲みを通じて交流。10人前後の住民が参加し、民生児童委員（以下民生委員）2人が世話役を務める。

体操は一時間かけて全身のストレッチをする。「皆でやるから続けられる」と参加者。そのほかに、輪投げやカラオケ、行政や町社会福祉協議会の講話なども催してきた。

この日は、口のエクササイズに挑戦。まず、童謡を「パピポペポ」に変えて斉唱。続いて「ありさんあつまれアイウエオアオ」と発音練習。なじみのないフレーズに、言い間違えが続出。語感のおもしろさもあって、温かな笑いに包まれた。「スラスラじゃおもしろくないから良かった、楽しかった」という声に、「じゃあ、今度新しいのを探して来なきゃね。慣れないように」と民生委員の遠藤タキ子さんが応じる。

活動終わりのお茶飲みも大きな楽しみだ。「いろんな話が聞けて、情報が入ってくる」「こういうところへ来ると楽しいね、皆の顔見てさ」と参加者。「月一回だと忘れる。毎週だから行くことと思える」と話す人もいた。

こうしたミニデイは、以前は檜葉町内の約20地区で開かれ

ていた。しかし、東京電力福島第一原発事故の影響で全住民が避難。2015年に避難指示が解除されて、住民の帰還が始まったものの、現在も人が戻らず再開の目途が立たないところもある。17年から再開した山田岡地区は、当初月一回の開催で、「Jヴィレッジ」のトレーナーから体操指導を受けていた。「月一回では足りない」と好評で、CD音源を使って、住民が自主的に週一回の体操を行うようになった。

民生委員の飯島富子さんと遠藤さんは、見守り訪問時にミニデイの参加を呼びかけ、「ミニデイが見守りにもつながる」と期待。昔からこの地区に住んでいても顔なじみのない人もいて、住民の関係づくりにも役立つ。

町に商業施設ができ、インフラは整いつつある。「ようやく元の生活ができるようになってきた」と遠藤さん。一方で、「若い人は7年も過ぎると避難先で落ち着き、なかなか帰ってこれなくなつた」という。

9月30日時点の町内居住率は約50%。それでも、「いまいる人で楽しくやっていくしかない」と前を向く。帰町した住民で仲睦まじく、生きいきと日々を過ごすためにこうした集いの場は大きな意義をもつ。



まじわる！ 集団移転＆ 災害公営住宅

第37回

ラジオ体操を通じて 世代間交流も

玉浦西地区
(宮城県岩沼市)



体操を通じて、住民同士でふれあう

防災集団移転地として2016年3月に転入が開始された、宮城県岩沼市の玉浦西地区では、平日毎朝6時30分から、2か所の集会所前でラジオ体操が行われている。高齢者を中心とした地区住民有志の活動で、開始当初の17年10月は1か所に集まっていたが、地区内でも自宅からの移動

距離が長くてたいへんだという人もいたことから、足を運びやすくするために18年6月から実施場所を2か所に分けた。それぞれのメンバーは10人ほど。自分たちでラジカセを用意し、ラジオの音楽に合わせて身体を動かす。

ラジオ体操をとおして毎日のように顔を合わせ、あいさつを交わし、その日の体調や予定について話をしたり、情報交換をする機会になる。いつも来るメンバーが来ていない日は、皆が自然と気にするようになる。さらに、気にかけて合う範囲は、その場に出てくるメンバー間に限らない。集会所のすぐ近くでは、家から出なくても、窓を開けてラジカセの音を聞きながら、室内で体操する人もいる。メンバーは「体操の時刻になっても、その家の窓が閉まっていると、少し心配



大人も子どもも、広場で大きな輪になって、約40人が参加

になる」と話す。8月20日から24日までの5日間は、同じ時間に、地区内の小学生たちも参加。同地区の子ども会から、「夏休み中に、小学生もまぜてもらいたい」と相談があったことから、子どもたちと一緒に体操をしたのだ。ラジオ体操の常連メンバーも、「ふだんは子どもたちを見かけることはあっても、なかなか交流する機会はなかったが、5日間で子どもたちとふれあうことができたと話す。また、子どもと一緒に親も参加することで、大人同士

の距離も近づいたようだ。地区で見かける小学生たちの親の顔を知ることでもでき、自分たちの地域に関する理解がより深まった。最近では、夏季休業期間のラジオ体操を必須としない小学校も増えて、わざわざラジオ体操が実施されない地域から来てまざった子どももいたという。ふだんからラジオ体操に集まっている、玉浦西2丁目区長の森さんは、「地域の子どものこともたいせつにしながら」「大人ばかりでなく、子どももいると、自分も頑張らなくちゃいけないと思う」「これからもラジオ体操をずっと続けていきたい」と語る。また「来年の夏休みにもまた子どもたちと一緒に体操したい」と、楽しみが増えた。体操に、健康維持だけでなく集い場としての意義を感じ、日々、地区内の支え合いの基盤を固めていく。

清

DATA

いわき農園

〒028-1303
岩手県山田町荒川3-81
電話 080-3144-1554
iwahaji@hotmail.co.jp
http://ameblo.jp/h-iwaki

67回目

市民リレー

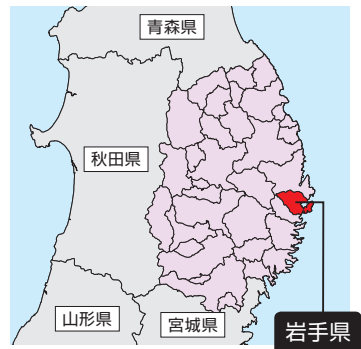
東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

食をたいせつにする気持ちを つなげる農業をめざして

◎いわき農園(岩手県山田町) ライター: 元持幸子



岩手県
山田町



新鮮野菜摘み取り体験会の様子

野菜づくりへの思いを語る代表岩城創さん

野菜摘み取り体験会用の畑で生育を確認

いわき農園は、岩手県山田町の荒川地区の休耕していた農地を借り受け、2011年4月より有機農業の野菜生産をスタートした。いわき農園代表の岩城創さん(39歳)は、「日本の食事情や食べ物のたいせつさを改めて感じる機会があり、食を支える生み出す仕事をした」と思い、8年前に農園を始めた。就農時の思いを語った。農園開始当初から、地域の先輩農家や関係機関よりサポートを受けて農園整備や野菜づくりのノウハウを学び、徐々に活動を軌道に乗せてきた。現在では、ピニールハウスや露地栽培での野菜生産を年間を通じて行い、地域のスーパーや産直、首都圏のレストランにも卸している。

岩城さんは、農園の野菜を通じて食べ物のだいせつさを伝えることにも力を注いでいる。地域の小学生の職場体験の受け入れや、交流企画も農園で行う。野菜の収穫時期に合わせて、年に3回、新鮮野菜の摘み取り体験会を開催している。夏には5色のミニトマト、秋には大根や人参などを収穫し、農園で調理して食べる企画だ。身近に農業や食に関心を持ってもらえるように、野菜農園を体感し、味わってもらおうことから始める。言葉ですべてを説明するのではなく、一緒に農園での時間を過ごしていくなかで農業や野菜の話をしていく。「生産者にとっても、顔の見える消費者の声を聴くことができるよい機会だ」と、岩城さんは、農園での交流企画を楽しみに畑の準備を進めている。リピーターも増えてきた。親子連れの参加者からは、子どもが自然にふれあいがら野菜に興味を示していることや、安心感を持つて食べられることをよるこぶ声が寄せられている。

岩城さんは、「有機農業で野菜づくりをしていくことで、家族連れや地域の人びとが農園で楽しみながら交流したり、食や農業に関心を持つ人が集まってくるような農園をつくっていききたい」と、これからの農園の可能性を語った。

「自宅でカフェを開きたい」。地域の高齢者やひとり暮らしの人たちのため、場になればと、定年退職後にオープンさせたカフェで、手芸や工芸の体験教室などさまざまな催しを開き、地域内外の人が集います。

店主の哲夫さんと厚子さんが温かく迎えます



自宅のリビングルームが、居心地の良いカフェスペースに



DATA

カフェ・時代屋

宮城県名取市増田一丁目5-4
TEL / FAX 022-384-4670
営業日：火～金曜日・第2土曜日
午前11時～午後4時



着物リメイクのほかにも、キルトや琴、飾り巻き寿司など、幅広い体験教室を用意



多様な分野のハンドメイド作家から、衣類や雑貨を預かって販売



こだわりのエイジングコーヒーや料理が、お手頃価格で楽しめる

宮城県名取市◎カフェ・時代屋

宮城県名取市の住宅街にある喫茶店、「カフェ・時代屋」は、こだわりのメニューを提供するだけでなく、体験教室や手づくり品の展示会などを開くことで、より多くの人が集い、ふれあう場になっている。

代表の村上哲夫さんの妻、厚子さんが、以前から自宅に講師を招き、着物リメイク教室を開いていたということもあり、いまでは、そのほかさまざまな催しを用意。参加者から、「皆で笑い合える」と好評だ。哲夫さんも、「退職して暇をもて余すのではなく、お客さまとの出会い、会話を楽しんで過ごさせている」と、カフェを運営する生活で充実している。

毎週、食事に来る夫婦がいたり、町内会役員が打ち合わせの会場として利用してくれたりするほかにも、児童発達支援放課後等デイサービスが社会見学の一環で、利用していくこともある。東日本大震災によって自宅を失い、沿岸部を離れて内陸地域で生活を送ることになった人が、カフェや教室を楽しんだり、知り合いと久々の再会を果たしたこともあったという。カフェという憩いの場のもつ可能性は未知数だ。清

被災地域で より多くの笑顔を生み出すお手伝い

◎特定非営利活動法人日本ホスピタル・クラウン協会 クラウン・マミーさん



病院の小児病棟を訪れ、入院生活を送る子どもたちを励ます、「ホスピタル・クラウン」の活動をしているクラウン（道化師）・マミーさん。東日本大震災後には、各地のクラウンとともに、災害公営住宅などにも足を運び、手品や曲芸などのパフォーマンスを披露している。入居者とのふれあいはもちろん、入居者同士の交流も生み出している。

ホスピタル・クラウン

困っている人や、つらい思いをしている人がいると、いてもたつてもいられないという気持ちがあり、それが私たちを突き動かしています。しかし、いまたいへんな思いをしている人たちに笑顔をお届けするというよりも、皆さんから笑顔を見せていただいています。

それまでつながりのなかった人が、その場のやりとりに加わることで、いつもとは違う風が吹き、気持ちも軽くなったりすることもあります。私たちのパフォーマンスによって、明るい気持ちになる一瞬を、その人がその先で思い出したとき、もしかしたら、何かの役に立てるかもしれない。そう期待しながら活動しています。お客さんに、客席から前に出てきてもらって、一緒にショー

に加わってもらうことも多いです。ただ見ているだけのときは違う楽しみがありますし、今日も、ステージに出ていただいた男性が、あとで子どもたちから英雄のように扱われたりして、ショーへの参加が新しい話題に結びつくこともあるので、うれしいです。

私たち自身が、「キヤー！」とか「ワー！」ってよろこばれたり、「また来てね」と言ってもらえるのも、もちろんうれしいです。何度も見てくださる人もいるので、技を磨いて、1つ、2つ、芸を増やし、新しいものを見てもらうことで、前よりも大きな笑顔でいただけるように心がけています。私たち自身が笑顔でいられることも大事なことです。 (談)



災害公営住宅でテントを特設してパフォーマンス

どごでもサロン

第15回

自然なつながりと支え合いを生み出す



集う仲間は「家族同然」 青空学校

福島県猪苗代町長坂地区

福島県の中央、猪苗代湖の北にそびえる磐梯山（1816m）は1888年、激しい噴火を起こした。北麓の農村集落の一つ、猪苗代町長坂地区は、岩なだれに伴う泥流に襲われ、当時暮らしていた25世帯149人の6割近い86人が犠牲となった。

「家の大黒柱を失った家も少なくなかったが、残された住民は長坂を離れず、よそに出ていた子どもや親類たちとも力を合わせ、必死になって集落再建を図った」。こう語るのは地区の老人クラブ会長、黒澤孝さん（75歳）。「その精神が今に受け継がれている。だから住民のまとまりがいい」。

まとまりのよさは、2001年から「集落農場」を旗印に取り組んだほ場整備事業でも発揮され、合意形成から事業完了まで比較的早いペースで進んだ。

08年に水田19畝と畑地2畝の集約がほぼ完了すると、田畑でおしゃべりに興じる住民の姿がしばしば見られるようになった。

「以前は、田畑があつちの山の陰、こつちの山の陰とばらばらだった。1か所にまとまったおかげで、畑に出れば誰かしらに

会えるようになったんだよ」と喜ぶのは山内愛子さん（85歳）。

山内さんの同居する長男がその様子を見て、不用品の物流パレットで農地の一角にアウトドアデッキ（縁台）をつくってくれた。

荒天でなければ毎日午前午後1日2回、主に70〜90歳の住民10数人がここに飲み物や手料理、菓子を持ち寄ってお茶飲みを楽しむ。いつしか「青空学校」と呼ばれるようになり、もう10年近く続いている。

「これが楽しみで畑に来てるようなもんだ」と山内さん。畑仕事と青空学校が「元気の秘けつ」という。

仲間同士、毎日のように顔を合わせていれば、お互いの体調の変化や困りごとにはすぐに気づく。注意を促したり、手助けしたりできる。通院などで畑に来れないときは、あらかじめ仲間知らせておく。

「無断欠席」すると、誰かが心配して様子を確かめる。「仲間には家族同然」と青空学校に集う人たちは口をそろえる。

長坂には現在23世帯83人が暮らす。高齢化率は34・9%（18年8月末時点）。昔から



住民関係が良好なうえ、青空学校のような集いの場もある。「集落二家族」で支え合いながら、安心して暮らせる地域をつくっている。木

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ

サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

老いたワーカーからの遺言(その7)

今回は、「福祉の常識＝社会の非常識」、についての遺言。2015年日弁連の人権大会で『成年後見制度から意思決定支援制度へ』というテーマに戸惑いを感じつつ、おもしろそうと参加。

介護保険などは、契約に基づいての制度・サービス利用となるが、本人との契約とはなっていない、形式的で家族などの意向に左右される傾向にある。ケアマネジメントの実施にあっても、自律的という本来的な様相とはほど遠い実態がある。だからときどき、措置の時代とどこが違うのか、わからなくなる。『本人の最善の利益』を付度し、代理・代行決定を進めることへの警鐘、福祉現場での利用者本人の意思決定を基本にする取り組みの形骸化、無理解さを指摘し、福祉業界の歪な常識を顕在化した。自分勝手な振る舞いからして、自己決定権をはく奪された(?)ダメな親爺たちとは違い、高齢者や障がい者が、認知症だから、精神障害だから、知的障害だから、と意思能力が喪失されているかのような扱いは、それが福祉現場で公然となされているとすれば、即レッド・カードのはず。このことに気づくのに、なんと時間を費やしたことか。またチョコちゃん(NHK総合)に叱られそう。自律的で主体的に権利、人権について考えていく法律の専門家と比べ、ワーカーの受身的で、消極的な権利擁護支援、日頃からリーガル・アドボカシーに並び、アシスティブ・アドボカシーのたいせつさを言ってきたが、権利意識、人権感覚にかかる認識の薄さに、どっちを観て仕事をしてきたのかと反省(反省ばかりの人生ですなえ。ガックリ)。

もっとも、日本社会全体が、まだ封建社会(?)にあるので、代理・代行決定の必要性も高く、成年後見制度がないと困ります。本人の人権・生命・財産を守るに欠かせない「消極的な権利擁護」のツールとして。しかし、世のなかがよくなくなっていく過程でたいせつなのは、本人の意思決定による地域生活・社会生活を支える「積極的な権利擁護」です。なので、意思決定に係る支援のあり方を国民的に議論すべきなのです。時間をかけて、丁寧に。

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上章



“丁寧に暮らす” ことに触れて考

ある方から、『〇〇さん宅では、旬のものを大事に食され、庭の植栽をきれいに手入れするなど、とても丁寧な暮らしをされている』と、教えていただいた。“丁寧な暮らし”ということに強く惹かれた。以前から私のなかに、山や海に囲まれて、自然と調和したシンプルな暮らしに憧れのようなものがあつた。“丁寧な暮らし”という言葉でその思いが揺り起こされた感じがした。

ところで“丁寧な暮らし”ってどんな暮らしなのか?この間、いろいろと考えてみた。思い浮かぶのは、自然と調和して生きること。いまある自分や暮らし、仕事、活動、人、生きもの、ものとの関係を見つめ大事にし、味わい、楽しむ、感謝する。心静かに、心をいまにとどめて、五感で感じるものに意識を集中する。自分を見つめ、心の声に耳を傾けること、など…。たとえば、季節の移ろいのなかで出会う花や虫に語りかけ、野菜や果物、魚などを味わっていただく。食器やものを丁寧に扱う。暮らしに余分なものを始末し、所有するものを少なくして心を自由に遊ばす。そんな暮らしや生き方のことかな。しかし、現実の自分の暮らしはその思いとはほど遠い暮らしをしていることに気づかされる。

12年前に、四国88か所霊場を一人で歩いて巡礼した。白衣に金剛杖、菅笠、納経帳、経本を携えて早朝から歩く、総歩行距離は1200キロ超。お寺を参拝し経をあげる。山道を、海沿いの国道を、集落の道を一人黙々と歩く。それは、自ずと自分を見つめることにもなった。歩き遍路の仲間、土地の人、遍路宿の人とのふれあいや“お接待”が新鮮でうれしかった。山の息吹や川の聖を感じ、鳥のさえずりや風の音に耳を傾け、時に草むらに寝ころぶ。まさに自然に抱かれているような感覚があつた。肉体的にはとてもきつかったが、毎日が楽しくて心満たされ、とても幸せな50日間だった。

自然と調和して一人でゆっくり歩く、自分を見つめいろいろな人、ものとの出会いをたいせつに愛おしむ、という四国歩き遍路の経験のなかに、日々の“丁寧な暮らし”、につながる一つのヒントがあるような気がする。そのために、いまから私ができること?身の回りの余分なものを少しでも減らす、心をいまにとどめて目の前の人や物をたいせつにする。そこから始めてみよう。

平成30年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<支援に関わるための基礎研修>

【仙台会場②】 10月22日(月)～23日(火) 仙都会館

講師:永坂 美晴(兵庫県明石市社会福祉協議会 地域総合支援センター 地域支え合い推進担当係長)
山本 信也(兵庫県宝塚市社会福祉協議会 地域福祉部 地区担当支援課 課長)

<ステップアップ研修>

【仙台会場】 11月13日(火) エスポールみやぎ

講師:永坂 美晴(兵庫県明石市社会福祉協議会 地域総合支援センター 地域支え合い推進担当係長)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



相談員による見守り訪問。住民の話に傾聴し、サロン参加を勧めるなど、必要に応じて情報を提供する



暮らしを支える支援員32

市内外に暮らす 被災者のいまを見守る

名取市サポートセンター「どっと.なとり」
(宮城県名取市)



宮城県名取市内外の借上げ賃貸住宅（みなし仮設）や災害公営住宅の入居者、在宅被災者等を戸別に訪問し、見守りを行う「被災者サポート生活相談員」（以下「相談員」）。名取市が震災後に開設した「名取市サポートセンター『どっと.なとり』」に所属し、被災者支援を続けている。現在の相談員は地元住民はじめ6人が雇用されている。

見守りは水曜日を除く平日と土曜日の毎日行っており、二人一組の相談員が、一日当たり8～10件程度を車で巡回。市内在住者のほか、仙台市や角田市など近隣の他市町村に移転した世帯も訪問する。平日に不在が続く場合、土曜日に再度訪れている。

訪問時、相談員は玄関先で立ち話をするなかで、「昨日暑かったですけど、体調崩さなかったですか」といった健康面や「一日どんな感じで暮らしているんですか」「悩みなどをお話する人はいるんですか」といった生活面を尋ねて、カルテに記録していく。なるべく普段の生活の様子を見られるように、事前のポイントメントはあえてとっていない。

「傾聴や距離感をたいせつに接しています」と、相談員の相澤早苗枝さん。必要に応じて自分のことも開示し、自然な会話を通じてコミュニケーションを図り、住民に寄り添う。訪問は数分のこともあれば、積もる話から一時間以上に及ぶこともある。「遠方の方は『ここまで来てくれたの』とよろ

こんでくださる。訪問先で打ち解けて、感謝の言葉を述べていただいた時は、仕事のやりがいを感じます」（相澤さん）。

一日の訪問終了後には、カルテの記録をデータベースに入力。管轄する市の生活再建支援課の職員で回覧し、共有している。毎週水曜日には、相談員と市職員で全体ミーティングを開き、「見守り困難なケース」「入院していた住民」など訪問先の情報を交換する。相談員や市職員から要望があれば、訪問頻度を増やして見守る世帯もある。

見守り訪問後、必要に応じて、適宜関係者である地域包括支援センターや保健センターにつなぎ、見守りに同行し、専門家の目線からケアに当たってもらう。また、沿岸部の民生・児童委員の定例会議に生活再建支援課の職員とともに相談員が出席し、独居の高齢者や日中ひとりになることが多い高齢者がいる世帯において気になる世帯は、担当地域の民生・児童委員に関係機関との二重の身守りを依頼することもある。

住民の声に耳を傾けて、元気になれるような言葉を投げかけ、時に住民の発した異変のシグナルに気づいて必要な手を差し伸べる。——復興の途上、日常へと歩み始めた住民のそばにいる。田

DATA 名取市サポートセンター『どっと.なとり』
仙台法務局名取出張所2階（名取市震災復興部生活再建支援課内）
TEL 022-290-2090 FAX 022-383-2383

☆次号予告 特集「生きがい手仕事」

平成30年度 宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

<地域支え合い活動実践研修2 お宝の発見から発表会の開催の方法を学ぶ～第1回住民研修（お宝探しのワークショップ等）への参加と講義・演習～>

【塩竈会場】 10月29日（月） 壱番館庁舎

講師：志水 田鶴子（仙台白百合女子大学 人間学部 准教授）

酒井 保（ご近所福祉クリエイション主宰 ご近所福祉クリエイター）

池田 昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）

平成30年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修

<生活支援コーディネーター基礎・実践研修>

【仙台会場①】 11月1日（木）～2日（金） エスポールみやぎ

講師：大坂 純（東北こども福祉専門学院 副学院長）

高橋 誠一（東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授）

志水 田鶴子（仙台白百合女子大学 人間学部 准教授）

池田 昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

72号の特集「わたしの家をみんなの集い場に」がおもしろかったです。自宅というくつろげる空間であるからこそ、リラクセスとレクリエーションがより深く結びつくのでしょうか。写真に目を移すと、サロンではなく親戚の集まりのように見えました。地域のなかに安らげる場を見つけることがたいせつなんだと感じます。（仙台市青葉区 S.N）

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

「落ち着いた日常を感じられるようになってきた」という声が取材先でもよく聞かれるようになりました。しかしまだまだ復興の途上。「被災者支援従事者の肩書を外して」も、違った形で自分の住む市町のためにできることを模索している人たちに、地域の希望を見る思いがしました。また、南三陸町社協の生活援助員や女川町のころ支援事業など、形を変えた支援も続いています。（田中）